

---

# 妖精だより

アイス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖精だより

### 【Nコード】

N4614V

### 【作者名】

アイス

### 【あらすじ】

下北沢駅の近くには、奇妙なアパートがある。その名は【もみの木荘】。下北沢の人間には【シモキタの化け屋敷】と呼ばれている。何故かって？そのアパートには人間だけでなく、妖精や妖怪といった『怪異』も住んでいるのである。これは、個性豊かな怪異たちと化け屋敷の住人たちが、春・夏・秋・冬の四季に分けてそれぞれがつづる物語を、日記風にして寄せ集めた、優しく暖かいおたより。

## わたしのトカゲ観察日記

### その一（前書き）

どうも！ アイスです。

以前短編として置いた「わたしのトカゲ観察日記」何ですが、

「妖精だより」として連載作品にすることにしましたww

連載とはいっても結局は短編集なのですが、それぞれが繋がりのある話という設定になっています。

今、「わたしのトカゲ観察日記」の別視点のものを書いておりまして、そちらもそのうち掲載する所存です。

そのついでとして、「わたしのトカゲ観察日記」もかなり改正したり（主人公の従兄とその友人の名前とか）加えたりしました！

最初はそこまでする予定は無かったのですが、何せ続編（とはいっても別視点なだけ）が思いついてしまったので、こうなったら連載にしてしまえ！ という勢いでこんな流れになってしまいました（汗）

ですから、恐れながら前に置いた「わたしのトカゲ観察日記」は排除し、改訂版を置かせて頂こうと思っております。

猛スピードで書いたものなので、字の間違いなどがあるかもしれませんが。もしありましたら是非教えて下さい。

## わたしのトカゲ観察日記

### その一

3月15日

わたしは「東京」という異世界でぼつんと立ち尽くしていた。ぐうーと腹の虫が鳴く。

最悪だ。

ここに来る前に何度も吟味したにも関わらず、良い物件が見つからない。途方に暮れ、ぼーっと見渡している内に、大都会のド迫力に再び圧倒され始めた。またお腹が鳴る。

どうしよう。これじゃあ、自立以前に飢え死にしちゃう。

縁起でもない考えが頭を過ぎったその時、携帯が鳴り出した。従兄のタカ兄からだ。

『物件に困ってたなら、とりあえず下北沢まで来いよ。良いところ知ってるからさ』

わたしは助け舟に飛び乗った。下北沢までの行き方を教えてもらい、電車へ乗り込む。というより、人の波で押し込まれた。息をするのもままならず、本気で死ぬかと思った。

窒息しそうになるのを堪えている内に、駅に着いた。

あ！

電車を降りると、ホームにタカ兄の姿があった。ここに来て初めて生きた心地がした。

「タカ兄、久しぶり！ 元気？」

「ああ、見ての通り。そつちも元気そうだな。お、髪切ったんだ。

似合うじゃん」

「本当？」

「うん。前よりずっと良いよ」

へへつと笑って三日前に切ったばかりの髪に手を添える。照れ臭かったけど、凄く嬉しかった。

「あのさ、この近くに『もみの木荘』ってアパートがあるんだ。見た目は不気味だし、四畳半六畳だからあんま贅沢は出来ないけど」それは分かる。初日から贅沢出来たら、苦労はしない。

でも、『不気味』……………？

「まあ、駅に近いから便利だし、家賃はかなり安い。俺もそこに住んでただけどさ、良かったら来いよ」

「本当？ 行きたい！」

「よし、それじゃあ決まりだな」

ああ、女子高生を卒業したとはいえ、やっぱりわたしはまだ子供だ。タカ兄がいてくれて、今凄くほっとしてる。まだ自分は子供なんだと思い知らされた。

何だかなあ。

大人になれない自分に苛立ちながらも、タカ兄の後について行った。

それから十分ほど歩いた所で、タカ兄が立ち止った。

「ここ」

「うわあ」

タカ兄の言葉通り、不気味だった。

一言で表すならば、薄汚れた洋風の幽霊屋敷。その幽霊屋敷を無数のモミの木が取り囲んでいる。ここが東京だということを忘れてしまいそうな程、樹の香りが充満していた。

だからだろうか。確かに不気味だけど、嫌な感じは一切しない。何て言うか、静けさが漂っていて心地良い。そんな空間に、この不気味さが上手い具合に混じりこんでいる。

「驚いたろ？」

わたしはアパートから目を離さず、首を縦に振った。

「ここに来た人は、みんな珍しがるんだよ。こんな都会の中じゃあ、幽霊屋敷なんて滅多にお目に掛かれないからな。俺も、最初は釘付

けになったもんだ」

思い出し笑いをするタカ兄。

ああ、大人なんだって思った。

ほんの少し前まではわたしと同じだったのに、しばらく見ない内にすっかり大人になってしまった。

感傷に浸っている内に、わたしは未知なるアパートの中へと招かれた。

奥から出てきた大家さんは、ごく普通のお婆さん。小柄でおっとりとした笑顔を浮かべており、古びた洋館に住む魔女とは程遠い。安心した反面、拍子抜けた。まあ悪い魔女が出てこられても困るけど。

このアパートの基本的な説明を受け、空いている部屋の鍵を渡された。わたしの部屋は206号室。ちなみにタカ兄は209号室で、わたしの部屋のすぐ近くだった。

建物の中も洋館そのものだったが、部屋の中だけは平凡な六畳四畳半の部屋だった。こんなお化け屋敷みたいな所に、ごく普通のアパートの部屋。何だか少し面白い。

疲れていたので片づけは後にし、とりあえず地べたで少し仮眠した。昼頃に起きてタカ兄の部屋に改めて挨拶に行くと、そこには何と彼の親友の和兄かずもいた。

「おお、ユキじゃねーか！ しばらく見ねえ内に、すっかり女になっちまって」

「はあ？ それどーいう意味？」

スポーツ刈りでごつくて巨体で悪人面と、見た目がもろヤクザなので怖そうだけど、陽気な口調がその雰囲気を一掃している。

「んなの言葉通りに決まってるんだろ。っーかお前え、髪切ったんだ。似合ってるんぜ」

「本当？」

「お前えみたいな男女にはな」

笑いながら冗談を言う和兄に、思いつきりチョップをかました。

呻き声を上げるが、石頭には全く効果無し。いつものことながら、ダメージを受けるのはこっちの手。

じんわりと痛みが伝わり、じろつとウザ男を睨み付ける。

だが女子大生になりたての小娘の威嚇に、大人の男が怖気づくはずもない。相変わらず、にやにや笑い続ける。ああうぜえ！ 今すぐぶち殺してやりたい！

心の中で呪いの言葉を浴びせていたら、タカ兄の拳骨が和兄に降り注いだ。どうやら、わたしのチョップよりは効果幕群のようだ。

和兄は呻き声を上げて頭を押さえている。さすがは大人の男。

「つてえ……、いきなり何しやがる！」

「俺はフェミニストなんでね。女性の味方なんだ」

タカ兄はというと、石頭を殴ったにも関わらず平然としている。

和兄はもちろんだけど、この人もただ者ではない。こいつら一体何食って育ったんだ。

アホな会話を交わした後、わたしはタカ兄たちの部屋にしばらくお邪魔させてもらうことになった。部屋の中を見てふと男二人じゃ狭いだろうにと思ってそれを口に出したら、和兄はちょっとした厄介事に巻き込まれたのでタカ兄の部屋に居座っていて、都合の良い部屋が見つかったら出ていくとのこと。タカ兄の世話焼きなところだけは昔から変わっていない。何だか少し嬉しかった。

しばらくしたらだと過ごしている内に、窓の外は暗くなりかけていた。別に用事があるわけではなかったが、今日のところは退散することにした。そして帰るとなると、初めての部屋、初めての一人暮らしというビックイVENTを前に、胸がとくんとくんと再び脈打ち始めた。

「ああ。ユキ、ちょっと」

タカ兄に呼び止められ、足を止めた。タカ兄は予想もしなかったことを口にした。

「言い忘れてたけど、ここでは朝一番と真夜中に怪奇現象が起こる

んだ」

「……………は？」

「基本的にどうってことは無いけど、ヤバかったら言うてくれ。いつでも相談乗るから」

真顔で言つてたけど多分、てゆうか絶対冗談だろう。冗談に決まってる……………うん。

そう納得することにした。いろいろと気掛かりな点はあつたけど、わたしの思考回路は普通に現実的なので、タカ兄が言ったことを真に受けなかった。

予め置かれている家具に荷物を全て仕舞い込むと、汗を洗い流すために銭湯へ直行した。

ここには風呂が無いけど、幸い近くに銭湯があるので、【もみの木荘】の住人は皆その常連らしい。わたしもこれからお世話になるのだと思うと、何だか胸が弾んできた。音楽隊が中で演奏してる感じ。パッパーパーパラパーって。

久々の温泉に存分に浸った後、食堂で夕食をとることにした。そこで食べたおろしそばは珍味ではないけど、大人の第一歩を踏み出したにわたしとしては最高に美味かった。

新鮮な空間を満喫し、アパートに戻った。しばらくテレビを見ていたら、ふと眠気がやってきた。ふわあと欠伸びが出る。

今日はもう寝よう。

わたしはテレビを消し、布団に入った。目を閉じ、明日からの生活を思い描きながら眠りに就くはずだった。

ガタ　ゴト

「？」

ガタ　ゴトン　ガタタ　ガ　ガタ



何の音……………？

わたしは眠たい目を擦つてむくりと起き上がった。耳をすませてみると、音は台所の方から聞こえてくるのが分かった。

ねずみでも歩き回ってるのかな。つたく、はた迷惑な。これじゃあ煩くて眠れんわ。

わたしはうんざりしながら、重たい体を動かして襖を開けた。そして固まった。

ガスコンロに置いてあるフライパンの上にはいたのは、ねずみじゃなかった。

猫ぐらいの大きさの、トカゲだった。

「……………は？」

惚けた声に気づいたトカゲが、ビクツと体を震わせてこつちを見る。そしてフライパンの上から床に飛び降りると、玄関に向かって一目散に這いずっていき、扉をすり抜けた。

「え、え、な……………？」

わたしは自分の見たものが信じられず、恐る恐る玄関に近づいた。だが、そこには巨大トカゲの姿はもう無かった。

……………えっと、これは、夢？

でも、頬を抓ると痛かった。どうやら夢ではないらしい。

てことは、ひょっとすると幻覚？ でもやけにリアルだったし、第一幻覚を見るほど病んではない。

あ、そういえば。

『ここでは朝一番と真夜中に、怪奇現象が起こるんだ』

そんなこと言ってたっけ。どうしよう。これは相談するべきか？  
でも……………幻覚だったら何か問抜けだしなあ。

頭を悩ませること数十分。結局、タカ兄に相談するのは止めにした。一体何が起こったのか分からないし、それにどうしても現実のものだと思えない。  
グルグル考えても頭が痛くなる一方だったので、この日はとりあえず眠ることにした。

\*\*\*

3月16日

またトカゲが出た。しかも今度はとんでもない、びっくり仰天な現れ方だった。

朝ごはんに目玉焼きトーストを作ろうと、ガスコンロの火を点け、フライパンに卵を落とした。

「んぎゃ！」

思わず変な声を出してしまった。

だって、火の中からトカゲが現れたんだから。危うくフライパン落つことすところだったじゃない。

3月17日

またフライパンを振っている時に火の中から現れた。今度は少し驚いただけで済んだ。が……………、

「なんじゃこりゃあ

「！」

前の日に買って冷蔵庫に入れておいた椎茸が、何故か消えていた。それもけしからんことに中身だけ消えており、残っているのは敗れた袋だけ。

「うぜえええええ！」

最初はもしやトカゲの仕業かと思っただが、どうやらトカゲではなくキノコ好きの透明妖精（何だそりゃ）らしい。これは後にタカ兄から聞いて分かったことだが、悪戯されたことには変わりない。マジでうぜえ。

更にその日の晩、ガシャーンと耳に劈く音で夢の世界から叩き起こされた。

何事かと思つて音のする方にそつと近づく。音は台所の方から聞こえる。それも何かが割れるような。

……………音？

「まさか！」

わたしが思わず声を上げると、台所の影から「キキーン」と猿のような泣き声と共にマジで猿が出て来て一瞬で姿を消した（おいおいおい）。同時に割れ物の音は完全に消え失せていた。嫌な予感が頭を過ぎる。

恐る恐る台所を覗いてみると、嫌な予感ほ泣けるほど見事的中した。先ほど洗った皿やコップが全て割られていた。床にはガラスの破片が無残に散らばっている。

「嘘だろおいおいおいおい！？」

思わず大声を出してしまった後に、ああしまった！ 近所迷惑で苦情が来ちまうと後悔した。これは後から聞いた話だが、もみの木荘では妖精たちによる悪戯で真夜中や早朝に騒音が鳴り響くことはしょっちゅうだから、騒音を気にする住人はいならしい。もはや無法地帯じゃねーか（二）。

3月18日

最悪な目覚め方をした。

いきなり頬に激痛が走ったのだ。あだだだだど大声を上げながら起き上がると、素っ裸の小さな女の子の小人（破廉恥じゃあああ！）がわたしから飛び降りて部屋の壁をすり抜けていった。

3月22日

これが一週間も続いたので、さすがにタカ兄たちに相談することにした。藁にも縋るってこういうことだろうな。

「実はこのアパート、駅からも近いし家賃も安いのに、必ず空き部屋があるんだ。何で分かるか？」

「何でって言われても……」

そこでタカ兄はとんでもない発言を連発した。

「ここでは怪奇現象が起きるって言ったろ？ それに見舞われることで、半端な精神力の持ち主だとちょっとしたノイローゼになるんだ」

「はあ？」

「それで『もうこんなアパートは御免だ！』って部屋を出て行くわけ。ちなみにそんなことがあるもんだから通称【シモキタの幽霊屋敷】って呼ばれてる」

「そんな所を従妹に紹介したんかい！ この薄情兄貴！」

「ユキの精神力は並以上の強さだと見込んで、ここを紹介したんだ。その証拠に、平然としてるし」

「いや、かなり参ってんですけど！」

「その様子ならまだまだ大丈夫。本当にノイローゼになってたら分

かるよ。目がイキかけてるからな」

ああ。やつぱタカ兄はごく普通のようで、普通じゃない(泣)。

「でもよ、話聞いてるとまだ被害少ない方じゃねーかと思うぜ。まあ俺はここに来てまだ日が浅いからはつきりとは言えねえけどな」

ただ今料理中の和兄が台所から顔だけをひよいと出してきた。和兄はヤクザの外見して行くせに趣味が料理で、得意と言ってるだけあって腕前も最高だ。タカ兄曰く、ご飯はカップメンなどインスタントもので済ますことが多いらしいが、和兄が居座ってからほぼ毎日手作りの料理を食べられてラッキーとのこと。強面に似合わずちやつかり使われてんなあおい。

「ああ。酷いところだと、二十四時間体制で悪戯されたりしてるらしいいな」

二十四時間体制って、どんだけ暇なんだよ妖精諸君。つーかその人気の毒過ぎる。

「こう言ってる俺も被害は少ないんだけどな。昔ここに入居して間もない頃に、俺は何らかのオーラが人よりはつきり見えるらしくて、そついう怪異とかの類に目をつけられにくいつて大家さんに教わったよ。よく分からないけど、まあユキも俺と同じ部類に入ってるんだと思うよ」

「ふーん」

オーラって、そもそも見て分かるものなのか。そしてそれが見える大家さんって何者だよおい。

「まあよく分かんねえけど、良かったじゃねーかユキ！ お前男女だから妖精の方から引いてったんだぜ、きつと」

また台所から顔だけを出してくる和兄。一言多いわ。

「あんま悪戯し過ぎてお前ブチ切れさせたら、命の保証ねえもんなあ」

うるせえよオッサン！と下品な声で怒鳴り返すわたしに、タカ兄が「おーい、対処法教えてやるから落ち着け」と呼びかける。わたしはクソウゼエ料理男を睨みながらも、対処法はムチャ気になるの

でしぶしぶとタカ兄の言葉に耳を向けることにした。

タカ兄曰く、夜寝る前に蚊取り線香を置いておくと何故か怪奇現象が起きにくくなるらしい。とはいっても、起きにくくなるだけだが。

わたしはしばらくしてタカ兄たちの部屋を後にすると、とりあえずその対処法を実行するべく近くのスーパーで蚊取り線香を買い、寝る前に設置した。

3月23日

朝確かめてみると、かなり効果はあった。

いつもよりも被害が大分減っていたのだ。そこで、蚊取り線香をもう二つほど置いた。そして見事、効果は倍増した。いやあ、良かった良かった。

だが、あいつにはどうしても効かないようだった。

チャーハンを作ろうとフライパンを出して火を点けたら、また巨大トカゲが現れた。

「あんだ、また来たの」

だが、嫌な感じはしなくなった。そいつはさほど害を及ぼさないので、無理に追い出したりはしない。まあ、少し慣れてきたってことかな。

「毎度思っけど、熱くないの？ そんなところから出てきて」

当然、返事は無い。ただ部屋の中をうろつくだけ。わたしはもう気にすることなく、料理を続ける。

しばらくしてご飯を食べる頃になると、いつものように玄関の扉をすり抜けていった。その時だった。

ピンポン

インターホンの音が聞こえたので、わたしは一旦食べる手を止めて

玄関に向かった。

「はい」

『あの、207号室の高塔たかとうですけど』

セールの場合もあるから気を付けろってタカ兄は言ってたけど、この若い男の声には聞き覚えがあった。何度か挨拶もしたことある。

「あ、はい。今開けます」

わたしはチェーンを外して扉を開けた。そして口をあぐりと開けることになった。

あ。

別に怪しい男ってわけじゃない。ここに来てから何度も見た顔だから、確かに207号室の住人だ。いつも無表情で、挨拶を交わしても愛想笑い一つしないから覚えてる。

「こいつ、最近ここに来てんですか？」

ただ、わたしと同年代と伺える若い男が抱いているものに目があった。

玄関の扉をすり抜けていったトカゲだった。トカゲの方は、体にくねらせまくって何か嫌がってる様子だ。おーい、下してやれよ。

「はい？」

それにしても、マジで突然だなおい。もしかしたら怪しい男と判断すべきだったか？

「最近、こいつ元気にしてます？」

「は、はい。まあ、元気ですよ。多分」

「そうですか」

「あの、そのトカゲとどういう関係で？」

「いや、別にどうこうって関係じゃなくて、ただしばらく居座っただけです」

居座るだけ……。

この人、今のわたしと同じだ。

「それで部屋から出たら、こいつがこの部屋から出てきたもんです

から、もし知ってたらこいつの様子聞いてみようかと思ったんです。それだけなんで、それじゃあ」

「ま、待ってください!」

頭で考える前に、そう口にしていた。男はその一声で反射的に立ち止まった。

「あの、たまに、この部屋に来てくれませんか?」

しん。

「……………は?」

「いや、何ていうか……………」

「新手的ナンパ?」

「んなわけあるか! そうじゃなくて」

わたし、何で引止めたんだろ? えっと……………。

「同じ話題の話し相手が欲しい。そういうことですか?」

「話し相手?」

「トカゲのこと」

なるほど。

言われてみれば、その通りだ。確かに巨大トカゲのことを話せる相手なんて、タカ兄達くらいしかない。でも彼らは仕事で忙しいから、いないのと一緒にだ。

「そう、かも……………」

「いいですよ。俺、別に忙しくないし」

「え! いいんですか?」

「ええ。俺もこいつのこと気になるから、ここ訪ねたんだし」

その瞬間、トカゲが男の腕から飛び降りた。

「「あ!」」

声を漏らすわたし達に構わず、トカゲは向こうまで這って行った。そして、空気に紛れ込むように姿を消していった。

「やっぱり爬虫類って、懐かないのかな」



言葉を漏らした男に、ふと目が行った。今までトカゲばかり気にしていたから気付かなかったけど、目が大きく細身で、もろジャニーズ風の風貌だ。無表情という点を除いて。  
わたしの好みとしては、もうちょい男らしい方がなあ。  
確信すると、恋愛に発展しそうな感情は薄れた。と思う。  
でも、あのトカゲの話をする相手が出来たのは少し嬉しかった。

3月24日

「あ、どうも」

その日はトカゲはもちろん、男も部屋にやって来た。

男を招き入れたところで、とりあえず名前を聞いた。名前は一応知ってた方がよい。

「そついや名前、何て言うんですか？」

たかとう まさみ  
「高塔昌実」

「『まさみ』って、何だか女の子みたい」

「よく言われます」

困ったような声で笑う高塔くん。とはいっても笑ってるのは声だけで、顔は何故か無表情だから違和感ありまくりだが、まあ今は良い。「まさみ」って名前が似合う可愛らしい面構えだし。

「そつちは何て名前なんです？」

ひゅうがおか ゆきげ  
「日向丘雪花」

「『ゆきげ』？ どう書くんですか？」

「雪の花。『せつか』とか『ゆきか』じゃ芸が無いからって」

「へえ。変わってますね」

「よく言われます」

無表情の男と他愛の無い話をしている間も、トカゲは部屋の中を這いずり続けている。

「相変わらず、よく動き回りますね」

「前から、あんなんですか？」

「まあ、はい。いきなり火から飛び出てきて、気が済むまで部屋をうろついて姿を消す。その繰り返しです」

「ああ、やっぱりわたしと同じだ。」

「ここに住人、俺ら以外にもトカゲに住み着かれた人がいっぱいいて、何人か仲良い人に聞いてみたら寝床は食器棚とかが主らしいです。俺は、フライパンの上でしたけど」

「は？」

「ある日、たまたまフライパンを置きっ放しにしたんですよ。そして変な音が聞こえて、見てみたらでかいトカゲがフライパンの上にいました」

「それって……………」

「わたしは胸を躍らせ、思わず身を乗り出した。」

「わたしもです！」

「やっぱり。あ、それと、俺ら以外に誰一人として、フライパンに乗られた人はいませんでした」

「え？」

「フライパンに乗るようになったのは、多分俺からです」

「それじゃあ、わたしは記念すべき(?)二人目かよ。」

「下ろそうとしたんですけど、フライパンの上がよほど気に入ったみたいで、中々離れなかつたんですよ。それでそれ以来、真夜中にそつと覗いてみると、必ずフライパンの上で寝てんです。スヤスヤと」

「そ、そこまでは知らなかった。今度見てみようっと。」

「朝になると、フライパンの上にはいなくて、ガスコンロの火を点けると何でかそつから出てきて、部屋中をうろつくんです」

「あ、そうだ。」

「でも、何のために部屋の中うろついてんでしょうね？」

「さあ。でも噂に寄ると、産卵する場所を探してるとか」

「……………産卵？」

「多分、俺はそうじゃないかと思えますよ。昔、兄貴が雌亀飼ってたんですけど、産卵の時期になると歩き回るんです」

確かに。それなら現実味があるから、納得がいく。

「あのトカゲって、雌なんですか？」

「さあ」

返事は二文字だけで拍子抜けだった。要は分かんないわけね。まあそこはしゃあないか。

納得がいったところで、最大の疑問を投げかけた。

「それじゃあ……………、火から出てくるのは」

「さあ」

また二文字かよ！と思わず声に出しそうになったが、出す一步手前で高塔くんが言葉を続け出した。

「ただ、あいつは普通のトカゲとちょっと違うってのは確かみたいですけど」

「というと？」

「……………あいつ、とんでもない低温動物らしいです」

？

「知り合いに妖精とか幽霊とか、そういうの詳しい人いて、話聞いたんですけど」

氷って、そいつはちよつとなあ……………

「あなたが触ったことは？」

「ああ……………触ろうとしたら逃げられました」

要するに、触ったことないわけね。

体が冷たい……………かあ。いくら話を聞いたところで、実際に触らないと信じられない。あんな悪戯に何回も遭わされたにも関わらず、私はやっぱり現実主義者のようだ。

ということ、わたしは行動に出ることにした。眠気を堪えながら、あのトカゲが音を立てるのをひたすら、ただひたすら待つ。

眠気でカクン、カクンと傾く首を持ち上げるのを繰り返すこと三十分。

ガタ ゴト

よし来た！ 後十分ほど待てば、そろそろ寝るだろう。

更に十分後。思惑通り、フライパンの上で睡眠を取るトカゲを発見した。

今や眠気など打つ飛ばし、わたしは胸を躍らせながらトカゲに触れた。

「うわ、冷たっ」

本当だった。体はふにゃっと柔らかいのに、氷のように冷たい。何だか変な感じだ。

「うわぁ」

凄い。そう呟いて、何度も触れた。新鮮な感触が何だか面白くて、何度も何度も。

シヤア

ッ

「え」

突然、トカゲが目を覚まし、奇声を発した。そして飛び起きると、真っ直ぐわたしを見据えて威嚇し始めた。

爬虫類なんて飼ったことないけど分かる。これは敵に向ける眼だ。「え、な、何？」

狼狽えながらも近づくと、トカゲは更に鋭い威嚇を向けてきた。

もうどうしようも無かったので、今日はとりあえず寝ることにした。結局、居た堪れない気持ち胸にこびり付いてるくに眠れなかった。

3月31日

あの日以来、トカゲの姿を全く見かけない。もやもやとした鬱陶しい気持ちのまま一週間経った。

わたしはいてもたってもいられなくなり、タカ兄にまた相談することにした。和兄はどこにもいなかった。どうやら都合の良い部屋を見つけたらしく、いつまでも居座っては迷惑だと今朝出て行ったらしい。

「そりゃあ無理だ。気長に待つしかない」

「気長って、どれくらい？」

「さあ。でも、今すぐは無理だよ。野生動物つてのは、警戒心が強いから、一度警戒しちまったら中々戻ってこない」

「ええー！」

そんな殺生な。本気でそう叫びたかった。

「まあ、どうしてもっていうなら、餌とかを仕掛けておびき寄せるところもあるけど」

「本当？ それじゃあその方法で」

「あまりお勧めは出来ないな。一・二回来ても長続きしない」

「そっかあ」

そう簡単に、戻ってくるわけないよね。やっぱ……………。

「また、会えるかな？」

「さあ。でも、それを夢見続けるのは良いと思う」

「？」

「だってさ、下手に動いて転げ落ちるより、夢を見てじっと待つ方が楽しいだろ？」

「…………… ああ、確かに」

「どうしても待てなくなつた時は、誰でもいいから思いをぶちまけると良い。スツキリすれば、また待てるようになる」

「…………… うん。ありがとタカ兄」

タカ兄は精神科医の伯母さん譲りで、時々哲学的なことを言う。よくまあ、そんなに言葉が滑らかに出てくるもんだと思つたが、彼なりの慰めだと分かつていたので感謝した。

4月1日

瞼が重苦しくて堪らないその日、高塔くんが唐突にビツクニユースを持ち込んできた。

「火から出現したのは、卵を温めるためらしいですよ」

「へ？」

高塔くん曰く、例の妖精マニアの知り合いさんにもっと詳しいトカゲの話をお願いしたら、その人が目を輝かしながら熱く語ってくれたらしい。てか前から思ってたんだけど、あのトカゲって妖精なのか？

彼女（どうやら女の人らしい。もしかすると彼女だったりする？）の話によると、あのトカゲは『サラマンダー』といって、四大元素を司る精霊の内、火を司る精霊らしい。いやだから、精霊とか妖精つつーより、モンスターとか妖怪つつわれた方が納得いくんですけど。まあ、今はどうでもいいか。

「あのトカゲは産卵期になると、自分の体温を卵に与えるらしいです。主に真夜中に。それで朝目を覚ますと、自分の体温を取り戻すために火に飛び込み、数秒間そこで暖まってから抜け出したとか。

普通は考えられない話だけど」

「だから夜中、あんなに体が……あつ  
もしかして。」

「何かあったの？」

「わたし夕べ触ってみました。そしたら本当に体が冷たかったから、興奮してつい何回も触っちゃって。最初は大丈夫だったんだけど、何回も触ってる内に目覚ましちゃって、多分……」

「警戒された？」

まさにその通りなので、わたしは首を縦に振った。

事実、今日の朝ガスコンロの火を点けても、トカゲは現れなかった。あの時べたべた触り捲くったことを、かなり後悔した。

「寝てたの起こされて機嫌悪くなったとかじゃないですか？」

「そう、かも」

トカゲちゃん、もう出てきてくれないのかな。

そう思うと、少し寂しくなった。

「あー、えつとー」

突然、高塔くんが間の抜けた声を上げたことで、わたしはいつの間にか感傷にうちひがれていたことに気付いた。現実を引き戻されてハツと顔を上げる。

「あんま深く考えなくてもいいと思いますよ。妖精って気まぐれなのがいっぱいいるらしいですから、その内戻ってくると思いますよ。まあ多分、別に怒ってるとか、あんたを嫌いになったとか、んなこととはないですよ。ちょっと機嫌を損ねてどっか行っただけで。爬虫類に好き嫌いがあるかも分かんないけど」

頭を掻きながら照れくさそうに吐き出す高塔くんの言葉は、羅列が多少乱れていて分かりにくかったが、彼なりにわたしを慰めてくれようとしているのは十分分かった。

ああ、無表情のままだけど、何だか一生懸命だなあ。

そう思うと、自然と顔が綻んできた。

「ありがとう」

感謝の言葉が素直に出てきた。思わぬ言葉だったのか、高塔くんが目を丸くした。

「ああ、えつと、まあ、うん」

それから高塔くんは無表情の顔を少し赤らめ、目を逸らしてしまっただ。

へえ、これはこれは。

今まではあの鉄仮面以外の表情なんて想像も付かなかったけど、意外と表情豊かなのかもしれない。普段が無表情な分、変化があると分かりやすい。

わたしはこの瞬間、ふと思った。

笑顔を見てみたいな、と。

「高塔くん、今度例の知り合いさんの所に連れてってほしいんだけど」

「へ？」

これは本当に予想外だったのだろう。高塔くんは顔を上げてまた目を丸くし、そのまま固まった。

「話聞いていると、怪奇現象的なこと凄く詳しくそうだから、トカゲのこともつといろいろ聞いてみようと思ったの。トカゲ以外にも、いろいろ話聞いてみたいし。いいかな？」

もちろん本心だ。楽しい話を聞くのは大好きだし、もしかしたらトカゲにまた会うヒントが得られるかもしれない。

だがそれ以外にも、高塔くんの笑顔が見られるかもしれない可能性を思い付いたからでもある。知り合いさんの前だったら、少なくとも会ったばかりのわたしよりはいろんな表情を見せてくれるかもしれない。

だが高塔くんは余程驚いているのか、まだ目を丸めた状態で固ま



り続けている。知り合いに会わせてというのは、さすがに図々しかったか？ あ、それとも……

「あ、もしかしてわたし、敬語じゃなかった？ ごめんねいきなりで。でもこの前わたしと同じ年って確か言ってたよね？ 同じ年だったら別にタメ語でもいいんじゃないかと思って」

「あ…… ああ、それは別に構わないですけど……構わないけど……」

わざわざ言い直して。この人、さっきから思うんだけどカワイイところあるじゃん。

「その知り合い、ちょっと変わった人なんだけど……」

ここで高塔くんが口ごもった。言いにくいほど変わってる人なのか、その知り合いさんは。

でも、そんなことはどうでもいい。

「大丈夫！ わたし、びつくりしないし普通に接するから」

「あー、びつくりしないのは無理だと思うんだけど、まあ、普通に接してくれるんなら……」

「いい？」

わたしは思わず身を乗り出した。高塔くんは少し驚いて体をちょっと引いたが、コクリと縦に首を振ってくれた。

「やったー！ ありがと高塔くん」

わたしは彼の笑顔を見るための目論見が成功したことで興奮が抑えきれず、高塔くんが戸惑っているにも関わらずしばらく大はしゃぎだった。そして落ち着いたところで日時と待ち合わせ場所を決め、その日はひとまず解散した。

高塔くんが部屋を出ていって一人になった途端、急に眠気が襲いかかってきた。

ああ、すっかり忘れてたけど、わたし眠たかったんだった。

まだ春休みで良かったわ。本当に。

そんなことを思いながら、さっきの大興奮が嘘だったかのように大欠伸をかき、布団に突っ伏した。

わたしのトカゲ観察日記

その一（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございますとついでにまたww  
次回も楽しみにしててください。

ご意見とご感想お待ちしております！

わたしのトカゲ観察日記 その二（前書き）

お久しぶりです！

ようやく続編を書き上げました。どうぞお楽しみくださいww

## わたしのトカゲ観察日記 その二

4月3日

午後一時、支度と戸締りを済ませてから部屋を出る。わたしが向かったのは待ち合わせ場所ではなく、隣の207号室だった。下北沢駅を待ち合わせ場所に指定したけど、よく考えれば部屋隣なんだから、待ち合わせする必要なくね？ と思い立ったからである。

まだ、部屋にいるよね？ つーかいるだろ。

もみの木荘から下北沢駅までは徒歩で三分。待ち合わせは午後一時十分で、今は午後一時ちょっと過ぎ。今部屋を出て下北沢駅に行くにはまだ早い。

わたしは部屋にいると確信し、部屋のチャイムを鳴らした。予想通り、高塔くんが扉を開けて顔を覗かせた。

「……………何」

寝ぼけ声でそう一言。崩れた服に虚ろな目で、明らかにたった今日を覚ましたばかりですって感じた。待ち合わせ十分前によくやく起きるってどんだけよ。こいつぁ、待ち合わせに毎回遅れるタイプだぜ。

「待ち合わせ下北沢駅って言ったけど、よく考えたらわたしたち隣同士でしょ？ どうせなら一緒に行った方が手っ取り早いと思うんだけど」

「……………ああ。言われてみれば確かに」

まだ寝ぼけ声だが返答が一言じゃないので、内容は理解しているとみた。

「ちよつと早いけどさ、行こうよ。待ってるから」

「……………分かった。ちよつと待ってて」

高塔くんはやはり寝ぼけ声でそれだけ告げ、一旦部屋の扉を閉めた。わたしは高塔くんの支度が終わるまで部屋の前で待つことにな

った。

ぼつんと一人で佇んでいると、ふと思いついた。

そついやわたし、男の子と二人きりで出掛けるって初めてだ。

てゆうか、部屋の前に突っ立ってるだけとはいえ、男の子の部屋に行くってのも初めてか。いつも高塔くんの方からやってきてたし。うわぁ……………何でかな。急に緊張してきた。

ガチャ

「終わったよ」

「ヒッ！」

一人で勝手に緊張しているところに、ふいに高塔くんが扉を開けてひょこつと顔を出してきたので、わたしは思わず声にならない悲鳴を上げた。

「何？」

「い、いや、何でもない。行こう」

口ではそう言いながらも明らかに戸惑っているのがバレバレなのだろう。高塔くんは首を傾げる。

「うん」

だが追及はしてこなかったもので、わたしは内心でホッと胸を撫で下ろした。ドキドキしてたのなんて言っても、引かれるか困ってしまつかのどちらかだ。

結局、部屋から駅に移動するまでの間、無表情を全うし続ける高塔くんの隣でドキドキしっぱなしだった。

下北沢駅から井の頭線に乗り、終点の吉祥寺駅で降りたわたしは現在、駅から徒歩五分のところに住むとある高層ビルの前に立つている。

「……………うわ」

わたしは見上げた体勢で、感嘆の溜息を吐いた。

だって、この高層ビルがマンションだって言うんだもん。高塔くん曰く、六十階建てとのこと。いわゆる高級マンションってやつだ。

「これ、家賃いくらくらいすんのかな」

「さあ。でも軽く二十万は飛んでくって言ってたような」

「二十万!？」

「ただ飛んでくんだよ! さすが都会の高級マンション。家賃の規模が半端ねえな、おい。」

「まあ、実家が超金持ちらしいから、大丈夫なんじゃない?」

「はあ……………。わたしも次は金持ちに生まれ変わりたいわ」

溜息混じりで呟きつつも、わたしは高塔くんと共に正面玄関の扉を開いた。二人でも緊張するんだ。一人じゃ入れんわ、こんな超高級なとこ。

住居者の名前と部屋番号の表示を、高塔くんが「えっと」と漏らしながら見回す。何せ五十階建てだ。名前と番号の羅列の数が半端ないので、探すのも一苦労な様子だ。

「ああ、あつた」

高塔くんが指差したのは、三十三階の3308号室の『風祭』かみまつりさん。うわ、何かカッコイイ名字じゃなか。

そんなどうでもいいことを思ってる間に、高塔くんは淡々と着実

に事を進めていく。部屋の番号を入力し、インターホンを鳴らす。その手慣れた動作から、前に何回か訪れたことがあるのだろう。顔色を伺ってみても、わたしみたいに高級マンションのど迫力に威圧されてる様子は微塵も無い。こりゃあ、一回や二回どこの騒ぎではない。

ただの知り合いってだけで高級マンションに、それもわざわざまで吉祥寺まで何度も足を運ぶわけがない。

やっぱり恋人同士なのかな。

「来たよ」

高塔くんがそう一言告げると、ガチャと部屋のロックが解除される音が響いた。「今開けるから」などといった返事が一切無かったのが奇妙だったが、言葉を掛ける必要もないほど信用しているということだろうか。

「行こう」

「うん」

高塔くんは声を掛けられて歩き出したものの、わたしは見えなくなるまで『風祭』の文字から目を離せなかった。

エレベーターで三十三階まで移動する。ガラス張りで街一帯を見渡せるという特典付きだが、エレベーター特有の無重力感が普通のマンションよりも長く続くので、あまり絶景を堪能する余裕は無かった。

「大丈夫？」

ふらつきながらエレベーターを降りるわたしに、心配そうに声を掛ける高塔くん。まあ、無表情には変わらないけど。

「うん、大丈夫。ちょっと酔っただけだから」

「そう」

てゆうか君、あの無重力感の後でよくそんなけるんとしてられるな。

エレベータで移動して降りるまでの間、無表情を貫き通した高塔くん。眩暈しまくりのわたしとしては敬意を表すほかあるまい。

内心で拍手を送っている間にも、わたしたちの足は3308号室へと向かって歩いている。さすがは高級マンションだけあって中もただっ広く、部屋まではある程度の距離がある。だが不思議なことに、距離感を感じることも無く3308号室に辿り着いた。謎に包まれた妖精マニア『風祭』さんへの好奇心と、高塔くんの笑顔見たさで興奮しているせいだろう。

高塔くんが部屋のインターホンへと手を伸ばす。彼の手の動き一つ一つで、わたしの好奇心と興奮は更に増していく。

どきんどきん、どきんどきん、どきんどきん……………。

がちや

部屋の向こうから足音が近づいてきて、扉が開いた。

は？

部屋から出て来た人物を見て、わたしは思わず口をぽかんと開けた。

姿を現したのは長い髪を後ろで団子状にまとめ、横髪を申し訳程度に垂らしているごく普通の女性だ。いや、これは普通よりも美人の部類に入るだろう。目鼻立ちは質素だが、彼女の落ち着いた雰囲気には逆にびつたりなくらいだ。一言で表せば大和撫子。着物がさぞかし似合うであろう和風美人だ。

が、わたしが固まっている理由はその美しさではない。

原因は、彼女の手元だ。



彼女はPDAをこちらに突き出し、液晶に並ぶ文字を見せている。そこにはこの一言があった。

『いらっしやい』

……………何ですか、これ。

そう。彼女は歓迎の言葉を口ではなく、PDAの文字で伝えているのだ。

ていうか何故、筆談？

これは後に思い立ったのだが、冷静に考えれば彼女が筆談を用いる理由は何となくでも想像できたはずだった。

だがこの時のわたしにとっては予想外の行動だったので、見た瞬間に頭がパニックってしまった。

「あー、えっと……………」

一方、高塔くんは彼女の筆談に驚くことは無かった。だがわたしと彼女を交互に見て、この状況をどう説明すればいいのか困っている様子である。

それぞれが違う理由で固まっているところに、彼女の方から高塔くんの肩をぽんと叩いた。にこりと柔らかい笑みを浮かべている。何となくだが、『いいのよ』とフォローしてる感じだ。高塔くんの顔からは困惑の色が消えないが、それでも肩を優しく叩かれたことで少しは負担が軽くなった様子だ。

彼女は高塔くんの肩から手を離すと、手慣れた素早い動きでPDAに文字を打ち出した。そして再びわたしにPDAの液晶画面を見せた。

『驚かせてごめんなさい。私、声が出せないの』

あ。

『でも大丈夫。これさえあれば普通に会話出来るわ。目も見えるし、

耳も聞こえるしね』

彼女はわたしが理解したのを確信したのだろう。にこりと微笑みを浮かべながらPDAを引っ込めた。

「あ、あの」

わたしは未だに混乱しながらも声を振り絞った。

「すみません、何か、変に驚いて……………」

本当言つと、あそこで驚かない方がおかしいのだから自分が悪いとは思わないのだが、それでも何か言うべきかなと思った。それに例えこつちに悪気がないにしろ、驚かれるのは気分の良いことではないはずだ。

混乱しながら謝罪の言葉を述べると、彼女はまたニコリと笑った。そして親指をグツと立て、『GOOD JOB』のポーズを取った。予想出来ない行動を前に、わたしはまた混乱する。

「大丈夫って意味だよ」

サラッと高塔くんが助け舟をくれた。もう普段の無表情に戻っているところを見ると、やはり彼女の障害への対応力がある程度付いているのだろう。

うーん、ますます恋人同士の可能性上がってきたな。

ふとまたそんなことを思ったが、今は状況が状況だ。助け舟に感謝する気持ちの方が圧倒的に勝って、すぐさま邪まな考えは消え失せた。

高塔くんの助言でわたしが納得したところで、彼女はひよいひよいと手招きをしながら部屋へ入っていった。今度は分かりやすい表現だったので混乱することなく、高塔くんと共に部屋に上がらせてもらった。廊下は広く、もみの木荘の部屋の廊下が虫けらのように思えるほど快適だった。

それにしても、マジで広いなおい。

部屋にはリビング・キッチンはもちろん、洋室が三部屋あって、

しかも風呂やバルコニーまで付いてやがる。さすがは家賃二十万。  
どんだけ金持ちなんだよ、この人。

内心で毒づいている内に、わたしたちはリビングまで案内された。テレビの前にテーブル・ソファと、誰もが憧れる構造だ。しかもテレビは既に地デジ化されている。アナログ放送終了までまだ一年以上あるのに、だ。ちくしょう、わたしだって地デジ欲しいよ。ピカピカの新品を前に、わたしの喉に住みつくお手てくんが今にも発動しそうだ。

彼女がソファに手を差し出し、こちらに笑みを向けてきた。「座って」ということだろう。高塔くんがソファに歩み寄って座ったことだし、わたしも同様にソファに腰を下ろした。うほ！ ふわふわだ。めっちゃ座り心地良い。

わたしたちが座ると、彼女は再びPDAに文字を打ち出し、そしてわたしたちに見せた。

『何か飲みたいものある？ うちには一通りそろってるから、何でも言って』

「俺はいつもの」

親指と人差し指で丸を作ってOKサインを出す彼女。『いつもので通じてしまうんかい。やっぱり浅い付き合いじゃないな。』

「えっとー、じゃあわたしはコーヒーで。ミルクと砂糖もお願いします」

後の付け足しがちょっと図々しいかなって思ったけど、こんな広い部屋に一人で住んでいるんだから、多少こつちが欲張ったって懐は痛まないだろう。事実、彼女は満面の笑みでOKサイン出してきたし。

『ちよつと待っててね』

彼女はそれだけ書き残すと、飲み物を用意するべくキッチンへと向かった。リビングに残ったのはわたしと隣に座る高塔くんの二人だけとなった。何でか急に緊張してきた。

えっと……………何か喋った方がいいかな。

チラリと視線だけ隣に移す。高塔くんの表情に変わりはない。相変わらぬ無表情だ。何か喋らなきゃと考えている感じでもない。本当に置物みたいだな、って思った。

一応男女が二人つきりで同じソファに座ってんのに、緊張一つしないのか。この男は。

それとも、わたしってそこまで魅力ないのかな……………。

……………って違う違う！ それは無い！

東京に来る前、大学に入学するこの機会に少しでも可愛くなるうと、雑誌見たり友達にアドバイスもらったりして、今まで部活一筋で全くと言っていいほど関心無かったお洒落に気を配ったんだ。髪だって、切った方が絶対可愛いよってアドバイスもらって、思い切った初のショートカットに挑んだんだから。友達もタカ兄も和兄も似合っって口をそろえて言ってくれたんだ。特別美人じゃないけど、全く魅力が無いってことはない…………はず。

「どうしたの？」

「え？」

「首振ってる」

高塔くんに指摘されて、無意識に首を横にブンブン振ってたことに気付いた。うわっ、何やってんだわたし。

「ああ、何でもないの。ちょっと考え事していたものだから」

ハハッと笑ってみたが、やはり焦っているのが顔に出ているようで、高塔くんは首を傾げている。それでもさっきと同じく「そう」とだけ言つと、後は追及することはなかった。

彼女と高塔くんは恋人同士なんだ。だから今更別の女の子が隣にいたって緊張したりしない。

うん、きつとそうだ。別にわたしに魅力がないわけじゃあ、ない。内心でそれが合理的だと納得するものの、何でもかもやもやは完全に消えてくれない。もうキリが無いので、これ以上考えるのは止めにした。とりあえず何喋るか考えよう。さすがにずっとだんまりだと、何か気まずいし。

でも、何喋ろう。自分で言うのも何だが、コミュニケーション能力はある方だ。でもこんな時に限って言葉が出ない。マジでどうしよう。

無表情の隣で頭を悩ませている内に、彼女がキッチンから戻ってきた。テーブルにコーヒーと紅茶が置かれる。わたしの前にはミルク入りコーヒー、高塔くんの前には紅茶が並んでいる。いつものって紅茶のことか。

「ありがとうございます」

二人きりじゃなくなっただことで内心ホツとしながら可愛らしいカップを手にとった。高塔くんのことはもちろん嫌いじゃないが、話題探しにあれ以上悩んでいたら頭がパンクしていたかもしれない。

そんなわたしの心情を知ってか知らずか（いや、知ってるわけないのだが）、彼女はわたしたちに向かい合う形でソファに腰を掛けた。改めて真正面から見ると、溜息が出るほどの美人だ。同じ女としては実に羨ましい。

「頂きます」

カップに口を付けてコーヒーをすする。インスタントか豆から淹れたコーヒーのどちらかは分からないが、少なくともスーパーで買って自分で淹れるインスタントコーヒーよりは断然美味い。多分豆から淹れた方かな。

「美味しいです」

彼女が嬉しそうにまた微笑んだ。さっきから思うけどこの人の笑顔、男どころか女のハートまで射抜いちゃう力あるぞ。これも美人の特権なのか。ちくしょう、羨ましい通り越して妬ましくなってきたぞ。大和撫子、侮れん。

目の前にいる小娘が内心でアホなことを言っただけで唸っているとは露知らず、彼女はPDAに文字を打って見せた。

『はじめまして。わたしは風祭風子。風子って呼んでね』

「あ、はい。わたしは、日向丘雪花です」

『ゆきげ？ 苗字も変わってるけど、名前は特に風変りね。どうや

って書くの?」

「えっと、日向に『嵐が丘』の丘、そして雪の花です」

『へえ! 雪の花で〃ゆきげ〃って読むんだ。素敵な名前ね。名前を付けてくださったご両親、センス良いわね。字面も響きも女の子らしくて綺麗よ。〃雪ちゃん〃って呼んでいいかしら?』

「はい。ありがとうございます、風子さん」

実際に声に出さないから照れがないのだろうか。名前で褒められたことはあっても、ここまで率直に「綺麗だ」「素敵だ」と言われたことは無かったので、わたしは嬉しくも何だか照れ臭かった。

風子さんはPDAの文字を書き換え、話題を変えた。ふと高塔くんとはどういった関係なんですかと聞きたくなったが、何となく答えを知るのが嫌になって止めた。

『それじゃあ自己紹介はこの辺にして、本題に入りましょうか。まずは火トカゲのお話からでいいかな?』

「はい! それ、すつごく気になります! 聞きたいです!」

高塔くんの笑顔を見たいという下心付きでやって来たのだが、トカゲのことは前々から気になっている。トカゲが姿を消して以来、気になり過ぎてロクに眠れないほどだ。

『ちよつと待っててね』

風子さんはPDAを引っ込めると、立ち上がって本棚へと歩み寄った。見苦しくない程度に敷き詰められた本の中から、ファイルをいくつか取り出す。そしてソファに戻ってきてテーブルに広げた。どれも汚れが目立つものばかりで、かなりの年季を感じる。

『私が学生の頃にまとめたものだから、古くてちよつと読みにくいかもしれないけど』

「いいえいいえ、とんでもない」

『分からないことがあったら聞いてね。大抵のことには答えられるから』

風子さんはPDAで文字を打ちながら、もう一方の手でファイルの束から『妖精ファイル?』とラベルが貼ってあるピンク色のファ

イルを手に取り、パラパラとページをめくり出した。起用なもんだなあ。

ページをめくっている間、風子さんは何やら口をパクパクと動かし、パツと顔を輝かせたところでページをめくる手を止めた。よく分からないが、「えっとえっと」「あ、あつた」って感じがする。

風子さんはそのページを広げたまま、わたしたちに見えるように反転させてファイルを差し出した。わたしは早速文字だらけのページに釘づけになった。

【サラマンダー……………火、水、風、土の四大元素の内、火を司る精霊。

・トカゲの姿をしており、手の平サイズのものから猫くらいのおおきさのものまでいる。火の中でも傷一つ付かずに生き続けると言われている。

・錬金術において、鉛などの金属を燃やして金に転換する瞬間、その温度の時の火から現れるとされている。そのため、錬金術の書物などには金に転換するための暗号としてサラマンダーの名がよく使われた。

・『ファイアサラマンダー』という実在のトカゲの逸話が元となっている。ファイアサラマンダーは、興奮すると乳に似た液を体の表面から出す性質がある。ファイアサラマンダーを暖炉の火にくべると、身を守るうとその液を出すため、しばらくは火の中でも生き続けるのだが、不死身ではないのでやがては焼け死んでしまう。

・アリストテレスやプリニウス、ディオスコリデスといった古代の権威がそう記述したことで、実験をして目でそれを確認した者が何人もいたにも関わらず、ファイアサラマンダーが火の中にも死なないという迷信は中世まで一般的に広く信じられていた。十八世紀に至っても、その迷信を事実のように記述した書物が出版された。また、ファイアサラマンダーには火力を増す力があるとも

信じられたため、ゾロアスター教徒が聖火を燃え上がらせる際にフアイアサラマンダーを火にくべた。

・サラマンダーが爬虫類や両生類ではなく昆虫という考えもあったようで、中世には石綿の布をサラマンダーの紡いだ糸で作られた布と偽って高価で売られたりしたらしい。

・イギリスの詩人、アレグザンダー・ポープによって書かれた英雄喜劇『髪盗人』にもサラマンダーは登場する。ただしトカゲではなく美しい女性の姿をしており、情熱的な女性は死後サラマンダーとなるとされている。】

うへえ、あのトカゲにこんないっぱい逸話があったなんて。さすがは妖精マニア。すごい情報量だ。

「すごいですね。これ、全部風子さんが調べたんですか？」

『いいえ、これくらいならサラマンダーって検索すればいくらでも出てくるわ。わたし自身の仮説は次のページ』

PDAの文字を打ちながら生き生きと目を輝かせる風子さん。こりゃあ相当の自信ですな。

風子さんがページをめくる。わたしはまた身を乗り出し、目を通し始めた。

「え」

そして、わたしは最初の一文で思わず声を漏らした。

【厳密には、サラマンダーという妖精はいない。今のところ、存在も確認出来ていない】

「サラマンダーは、いない？」

わたしは訳が分からず、顔を上げて風子さんに問いかけた。

「あの火トカゲは、妖精ではないんですか」

『いいえ、妖精よ。でも俗に言う妖精や幽霊は、人間が創作したものがほとんどで、実在するもので記述されているのは実はごく僅か。



その中でも、正確なことが記述されているのは更にほんの一握り。サラマンダーは、実在するトカゲを元に人間が創作したものの一つで、妖精として実在はしないのよ」

「それじゃあ、あの火トカゲは一体……」

「さっきの箇条書きの最後に、情熱的な女性はサラマンダーに生まれ変わるってあったでしょう？」

突然話題が変わり、わたしは一瞬だけ返答に詰まった。

「え、ええ」

「ポープは、ある意味的を射抜いたと思うわ。実際に見たかどうかは知らないけどね」

「どういうことですか？」

「あの火トカゲは、おそらく鬼火よ」

聞き慣れない言葉を目にし、わたしは首を傾げた。

「鬼火？」

「そう。外国ではウィル・オ・ウィスプ、イグニス・ファトウスとも言われるわね。要するに魂よ」

「魂？　じゃあ、あの火トカゲは幽霊なんですか？　でもさっきは妖精だって……」

「ええ。でも、そもそも妖精と幽霊が同種か別種かも分からないから、私には何とも言えないわね。とりあえず幽霊よりは妖精って表現の方が可愛いかなって思って【妖精】って言葉を使っただけ。さほど意味はないわ」

「ああ、なるほど」

まあ確かに、幽霊って言われるよりは妖精って言われた方が怖くはないわな。

「つまり、あれは魂。トカゲの魂なのか、人の魂が何らかの理由でトカゲの姿になったのかは分からないけど」

風子さんが言わんとしていることは分かる。でも、あのトカゲが魂だって言われても、あまりピンと来なかった。

「さてと、火トカゲの話はとりあえずここまで。突然ですがここで

問題です!」

ん?

PDAを突き出す風子さんは、何やらニヤニヤと悪戯好きなガキ大将みたいな笑みを浮かべていた。うわ、そんな表情をしていても絵になるなんて、美人ってズル過ぎる。

『昌実<sup>まさみ</sup>くんは終始ずっと無表情ですが、何故でしょう?』

この一言で、わたしはここに来た本来の目的を思い出した。再び胸がドキドキと弾みだす。でも今度はさっきとは違って、何故か胸が痛い。

「おい」

ここで、終始無言だった高塔くんが口を挟んできた。相変わらずの無表情だが、僅かながら不愉快そうに眉をひそめている。僅かでも彼が表情を変えるのは、初めて見た。

『確かに彼は感情表現が乏しいですが、でもけして普段から無表情ってわけじゃありません。ねえ? 昌実くん』

「やめろって」

高塔くんが声を荒げる。迫力などないが、怒っているのは一目瞭然だ。

『昌実くん』、かあ。

ああ、やっぱりこの人知ってるんだな。高塔くんのいろんな表情。

そんでもって、高塔くんもこの人の前じゃ表情を変える……………。

……………って、いつまでんなこと考えてんのよ。わたしったら。

この二人が恋人同士で何が悪いの。全然悪くないし、おかしくもない。わたしと知り合う前から面識あるんだから。

でも、羨ましいなあ。

『それじゃあ、とりあえず昌実くんの無表情については、きつと次の機会で明らかにするわ』

「次の機会？」

『ええ。今度、三人でドライブに行かない？ 私、良い場所知ってるのよ。そこはちょっとしたパワースポットでね、君たち二人をそこに連れて行きたいんだけど、いいかな？』

別に嫌じゃない。でも、突然のお誘いなのでどうしても躊躇ってしまう。

「はい。でも、何で……」

『それは秘密？ 楽しみにしてて』

PDAにハートマークを入れ、ピースサインをする。本当に、何やっても絵になるなあ。

「はいっ。それじゃあ、お願いします」

何だかんだ言ってもパワースポットは興味あるので、乗り気で承諾した。連れてってもらえるんなら行ってみたい。

『昌実くんもいいかな？』

「別にいいけど」

さっきの無表情の話が出てから、高塔くんはふて腐れたままだ。触れてほしくない話題だったんだろうな。

チラリと彼の横顔を目にする。背中を丸めていて俯き気味で、ツバメの赤ちゃんみたいに口を尖らせている。

何か、かわいい。

ふとそう思った。それと同時にまた胸がざわめき出す。

『それじゃあ決定！ とりあえず、来月のゴールデンウィークでいかしら？ 君らは大学入学したばかりで忙しいだろうから、ゴールデンウィーク辺りになれば少しは生活に慣れるだろうし』

「はい、助かります」

『OK。じゃあ、一か月後の5月3日、昼の二時ごろにもみの木荘

の正面玄関で待つて。迎えに行くから』

そうして日時と場所などを決めてから、わたしは連絡が出来るように風子さんとメルアドを交換した。一通り済ませたところで、今日のところは帰ることになった。

「コーヒー、ごちそうさまでした」

「ごちそうさま」

相変わらずふて腐れているが、高塔くんも挨拶をする。おい、もういい加減機嫌直せ。

『ねえ。外見たけど、雨降りそうよ。何なら送って行くの？』

「大丈夫です。わたしたち、電車で帰るし。ね？」

「うん」

『そう。気を付けてね』

わたしたちが部屋を出ると、風子さんは笑顔を浮かべながら扉を閉めた。エレベーターで一階まで降りて、正面玄関を抜ける。外を出ると、ちょうど雨が降ってきたところだった。しかも土砂降りだ。マジかよおい。

「うわ、最悪。天気予報じゃ雨降るの夜からだって言ってたのに。傘持ってないんだけど」

「俺、折り畳み傘持つてる」

高塔くんがそう言いながら、バッグから折り畳み傘を取り出した。

「おお！ 高塔くん準備いい」

「準備っつーか、入ってた」

「ただの入れっ放しかい！」

鋭く突っ込んだものの、今は傘が必要なので大いに感謝した。

「折り畳みだから、濡れるかもしれない」

「ううん、いいよ。気にしないで」

高塔くんが傘を広げ、わたしも中に入れてもらった。俗に言う相合傘だ。そして土砂降りの中、恐る恐る歩き出した。最初はお互いぎこちなかったが、慣れてくると安心して身を任せられるようになった。街中しばらく歩いていたら時折、他の歩行者たちの視線がこ

ちらに向く。

わたしたち、恋人同士に見えるのかな。

またドキドキし出し、チラリと隣の高塔くんを見る。

ん？

そして、高塔くんがやたら濡れていることに気付いた。よく見ると、わたしが濡れないようにする配慮なのか、傘をこっちに寄せていた。そういえばわたし、全然濡れてない。

「ちょ、高塔くん濡れてるよ！」

バツと高塔くんに傘を押し付けると、水しぶきが想いつきり掛かった。でも今はそれよりも、高塔くんの濡れ具合の方が重要だった。

「大丈夫だよ。俺、風邪めつたにひかないから」

と、また傘をこっちに寄せてくる。

「でも……」

「大丈夫」

「濡れるって」

「いいって。大丈夫だから」

「でも濡れるって」

「いいって」

その後しばらく傘の押し合いが続いたのだが、どんなに押ししても高塔くんが「いいよ」の一点張りだし、これ以上続けてたら水しぶきで二人共濡れる始末なので、わたしは仕方なく厚意に甘えることにした。

わたしよりちょっと身長高いだけだし、言葉数少ないし、ずっと無表情だし、男の子としては正直頼りないイメージ持ってたけど、でも意外と便りになる。てゆうか、優しい。

わたしは周りの目ばっか気にして、相手が濡れないようになって考えてもいなかったのに。

また胸がドキドキと脈を打ち始めた。今日だけで、何回ドキドキしてんだろう。

自分だって濡れて寒いだろうに、相変わらず無表情で嫌な顔一つ

しないし、ずっと無言で気の利いたセリフなんか一つも無いけど、何でだろう。暖かくて安心出来る。

高塔くんの顔をチラチラと見ている内に、わたしはドキドキの正体に気付いた。

いや、さっきから気付いていたけど、それが本物かただの興味本位かが分からなかった。今でもよく分からない。でも本物であれ、一時的な興味であれ、今現在、彼に暖かみを感じるのは紛れもない事実だ。

だからとりあえず、わたしの心に宣言する。

わたしは、高塔くんのことが好きだ。

わたしのトカゲ観察日記 その二（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。

まだまだ続きます！次はいつ載せるかわかりません。気長にお待ちください（おいっ）

ご感想とご意見、お待ちしておりますww

わたしのトカゲ観察日記 その三（前書き）

えー、今回はユキちゃんを暖かい目で見守ってやってください、と  
でも言っておきましょう（笑）



## わたしのトカゲ観察日記 その三

高塔くんとの波乱万丈（！？）な相合傘を終え、部屋に戻ったその日の晩のことだった。

部屋に戻った後も、ずっとドキドキが止まらなかった。息苦しくて、胸が熱い。でも何でか気持ち良い。病気じゃないかってくらい、胸の鼓動は一向に収まらない。

高塔くん、くしゃみしてたけど大丈夫かなあ。

本人は大丈夫、風邪引かないって言うってたけど、あのくしゃみの回数の多さじゃとても風邪なんてへっちゃらだとは思えない。

明日、様子を見に行こうかな。心配だし。

ぼんやりと、彼の部屋に行つて看病する自分を思い浮かべる。更に胸の脈拍が上がった。ああ頭がぼおつとする。これ、わたしも風邪引いたんじゃないの？ 尋常じゃないって、この息苦しさ。

自分を強引に納得させたところで、体温計を出してきて熱を測った。熱なんて全然なかった。

ああうざ！ 鳴り止めよ、わたしの心臓！ このまま続けてたら呼吸困難になつて死ぬぞおい！

もちろん、自分の臓器に向かって叫んだって何の効果もない。もうこれ以上は我慢ならず、わたしは何でもいいから気を紛らわそうとリモコンをひったくつてテレビを付けた。

テレビ画面には、夜明けを迎えようとする空の下、自転車に二人乗りをする少年少女が映し出された。車が通り過ぎる中、二人を乗せた自転車はスイスイと進んでいく。夜明け前で車もそれほど多くなく、歩行者や自転車なんてほとんど通っていないので、二人の自転車は歩道を独占し放題だ。

ああ、これ、『耳をすませば』のラストシーンに差し掛かるところだ。

そして、今週の金曜ロードショーが『耳をすませば』だという

ことを思い出し、時計を見た。確かにもう夜も深い。いつの間にかこんな時間になったのかと内心で驚きながらも、テレビ画面を見る。

わたしが『耳をすませば』を初めて見たのは確か小学一・二年生の頃で、ビデオで借りたのを覚えている。当時幼い子供だったわたしにも、このラストシーン直前は強く印象に残った。細かい心理描写とかはもちろん分からなかったけど、それでも幸せそうに二人乗りをする彼らに純粋な憧れを抱いたものだ。

そういえば、確かビデオ見終わった後『わたしタカ兄と恋人になったら、自転車で二人乗りするの！』って両親に自慢げに話したっけ。二人とも困ったように小さく笑ってたのを覚えている。あの頃は身近な男の子ということで、従兄のタカ兄が恋愛対象だったんだ。幼いなりに一生懸命で、『大きくなったらタカ兄と結婚するの！』を両親だけでなく、タカ兄本人の前でも連発してたっけ。当時中学生だったタカ兄は優しく笑っていたけど、今思えば対応に困っていたような気がする。

さすがに成長するにつれてわたしもそういった発言をしなくなっただけど、でも優しくして世話焼きで頼りになるタカ兄のことを、理想の男性像として見立てていた。

だけど、可笑しなことに今は理想であるタカ兄を覆い尽くすように、高塔くんの顔が頭から離れない。高塔くんは小柄で頼りなさそうだし、世話好きでもなさそうだし、ずっと無表情で何考えてるか分かんないし、およそわたしの理想からはかけ離れてるはずなのだ。なのに今は、高塔くんに対してずっとドキドキしている。

本当に可笑しいよ。わたし。

やがて少女の顔がアップになる。少女は頬を赤く染め、自転車をこぐ少年の背中に頭をこっんとくっ付けた。

うわぁ……幸せそう。

そんなことを思い、ふと高塔くと自転車で二人乗りするところ

を想像していた。気を紛らわすどころか、鼓動が更に高まってしまった。少しは懲りるよわたし！

結局何の効果もなく、それどころかドキドキが倍増して逆効果だったので、『耳をすませば』が終わったところでテレビを消した。

とにかく、明日のバイトに備えて早く寝よう。

そう言い聞かせると、高鳴る鼓動と共に息を弾ませ、ゆでだこみたいに頬を赤らめながら布団に潜りこんだ。寝に入るのに相当な時間が掛かり、ようやく眠気が訪れた時には、時計の針はもう午前2時を指していた。

4月4日

「いらつしやいませー」

わたしは現在、コンビニでバイトをしている。バイトの面接に行ったのが先月の中頃、採用が決まったのは下旬、あの火トカゲがいなくなつてしよぼくれていた一週間の間のことだった。まだ大学には入学していなくて授業の日程など分からないので、平日ではなく休日である土日の朝から夕方にかけてバイトをすることになった。

先週からバイトを始めたので、今日はまだ三回目。今はとにかく仕事を覚えていく段階である。先輩は思いの外優しく親切で、同期のバイトの子とも息が合い、バイト先の雰囲気は悪くない。仕事はまだ慣れないけど、でも今のところは順調に事が進んでいる。

この日も順調だった。表向きは。

カウンターで立っている時、会計をする時、商品を整理する時、その合間にも入り口の自動ドアが、客の出入りと共に開いたり閉じたりしている。

今日は自動ドアの開く音がする度に、反射的に入り口へと視線を移してしまうのだった。入ってきた客の外見が、同年代の小柄な男

の子だと思わず胸が弾んでしまう。その客が高塔くんじゃないと確信する度に、内心で頂垂れてしまう。客や店員の視界に入らないところにいる時は、本当に頂垂れてしまった。

まあ、確かにこの前、高塔くんはこのコンビニでバイト始めたって教えたけどさ。

あの時はまだ意識していなかったから、こんな思いするなんて思っ  
てなかったんだよ、くそ。

それに、来るわけじゃないじゃん。今は急用で実家に戻ってるんだから。

本人に聞いたわけじゃない。今朝バイトに行く前に高塔くんの部屋を訪ねてみたけど、出てこなかった。どうしたんだろって困ってたらそこに大家さんが来て、急用で実家に帰るんで、二日間ほど部屋を空けていると教えてもらった。恥ずかしいので相合傘をしたという点を覗いて、昨日のことを大まかに話して風邪をひいていないか聞いてみたところ、ピンピンしているとのこと。ああ、良かったと胸を撫で下ろしたものだ。

そう。彼がここに来るはずがない。

なのに、彼がふとコンビニに入ってくることを無駄に期待してしま  
う。

あんたのせいだよ、高塔くん。おかげでバイトにも集中出来ない  
じゃない。

彼が来るわけないって分かっているのに、その日のバイトも次の  
日のバイトも、終始高塔くんの姿を探してしまう始末だった。大き  
な失敗なんかはしなかったけど、今週のバイトは散々だった。

バイトが終わり、部屋に戻ったその日の夕方、高校の時の友人か  
ら電話がかかってきた。携帯を替えたので、再び携帯の番号とメー  
ルアドレスを登録してほしいとのこと。一か月ぶりということでは

々と話した後、メールが届いてアドレスと番号を登録した。そしてわたしは、家から持ち出したノートパソコンを開いた。

友人が電話で「ブログ始めたから、よかつたら覗いてみて」と言っていたので、ネットに接続してメールに載せてあるブログのURLを入力した。

一言で表せば、めちゃくちゃ充実してそうなブログだった。日記を主としている他、今話題の芸能人の裏話や料理のレシピ、二次創作イラストなど、多くのジャンルで溢れかえっていた。よくまあ、こんなにたくさんさんのジャンルの情報を頭に詰め込んで提供できるものだ。

訪問者数は今日だけでも二十人越えており、開設してから僅か一週間で合計二百人越えていた。最新もこまめにやっているらしく、ブログの運営だけでも大変だろこれと思ってしまっほどの充実ぶりだった。

ぼんやりとブログ内を巡っていると、一つの事柄に釘づけになった。日記で、日付は四日前になっている。

【今日は爆発宣言をしますww リア充爆発しろ！って人は見ないほうがいいのかも(@ @:.....(汗)

彼氏が出来ました！

彼氏いない歴〃年齢だったアタシにようやくおさらば出来ましたよ??\(\*^ ^\*)/?? バンザイ!!

何か夢みたいですよ、ほつぺを抓って見る。むぎゆう……アイタッ！よかつた、夢じゃない(\*´、\*)

相手は、高2の時からずっと気になっていた百均のバイトのお兄さんで、ちょっとしたハプニングで話をする機会が出来たんですww 今まで勇気出せなくて、なかなか声掛けられませんでしたから)

ハハツ)

そのハプニングというのが、もう可愛らしいんですww 年上なんですけどね(笑)

おつりを渡し忘れてたって気付いたお兄さんが、他のバイトの子にその場を預けてわざわざ追いかけてきてくれたんですよ。それも一階まで！ しかもそのおつり、いくらだと思えます？ たったの五円ですよ(笑)

そりゃあもうびっくりしましたよ！ だってシヨツピングセンターの中でエプロン姿で息荒げてるんですもん！ 何事だっと思っちゃいましたよ。あんまり予想外のことだったんで、憧れの人に声を掛けられたにも関わらず、ただ驚くばかりでしたもん。そんでお兄さんが、

『すみません、おつり、渡し忘れていたんで』と肩で息をしながら言うんですww アタシはもう驚きまくりでしどろもどろでしたよ。今時律儀ですよねえ、たったの五円で。

お兄さんはアタシに五円のおつりを渡した後、慌てて戻っていきましました。その時の後ろ姿が、何だか一生懸命で思わずクスって笑ってしまいましたww

何か、イメージと全然違ったんですよ。もっとう、テキパキして何でも器用にこなす感じだと思っていたんですけど、意外と可愛らしいところがあるんだなって思いましたww

それ以来、自分でも驚くくらい積極的に話しかけられるようになったんです。何ていうのかな、今までは年上って感じで、気安く声を掛けられなかったんですよ。だけど可愛いところがあるって知ると何か親しみを感じて、話しかけても大丈夫だって気になって勇気を出せたんです。不思議ですよねえ(ー)(- -\*)

そんで話しかけていく内に、趣味とかが似てるって知って意気投合して……………そして昨日、何とお兄さんの方から告白してきたんで

す！ ずっと憧れていた人でしたから、もう嬉しくて嬉しくてm( ; )  
;) m もちろん即OKでしたよ！ あんまり嬉しすぎたんで、  
こうしてブログ内で暴露してしまったわけです（ハハハハハッ）

これから彼との恋にどんな出来事が待ち受けているのか、すごく楽しみです！】

……マジかよおい！ アリサ！

わたしは思わず身を乗り出した。今までの記事の中で一番興味を  
駆り立てられたものだ。

彼氏、出来たんだ。あの憧れてたって人と、恋人同士になれたんだね。

おめでとうと心の中で呟きながらも、自分の中のどこかにぽつかりと穴が空いたような感じを覚えた。

わたしも、こんな風に実りたいよ。

もちろん可能性がないわけじゃない。今のところ友達としては順調だし。でも、その先を踏み出すのが怖い。

踏み出して、風子さんと付き合ってるって言われることが凄く怖い。

知らなかった。恋がこんな綱渡りのように危なっかしくて、不安定で、勇気がいるものだなんて。

自分で言うのもなんだけど、わたしは基本的に人とは積極的に接する方だから、好きな人が出来たら真っ直ぐアタックすればいい。そんな単純な考え方をしていた。

だから、恋をすることで自分がこんなに臆病だと知るなんて、夢にも思ってたなかった。

胸には相変わらず、霧がうっとうしくまとわりついてくる。ああ、

マジでうつとうしい！

こんな思いを四六時中抱えてたら、いくら並外れた精神の持ち主とタカ兄に断言されたわたしでも、身がもたない。もみの木荘の怪奇現象には次第に慣れて対応出来るようになったけど、恋愛はそうもいかない。

アリサに、相談してみようかな。

わたしはふとそう思い付くと、自分のありのままの気持ちを日記のコメント欄に記入した。

【はじめまして、ユーと申します。アリサさんのブログ、充実していて素敵ですねw w

この日記を読ませてもらいました。長年の恋が実るって嬉しいですよ。内容見るとアリサさんがどれだけ嬉しいか伝わってきますw あの、すみません。突然なんですが、相談にのってほしいことがあるんです。恋の悩みです。

わたし今、好きな人がいます。でもその人にはもしかしたら恋人がいるかもしれないんです。告白しなきゃ何も始まらないのは分かってるんですが、どうしても「彼女いるから」と断られるのが怖くて中々出来ません。

勇気を出して憧れの人に積極的に話しかけたアリサさんに、何かアドバイスを頂けたらと思います、こうして図々しいと思いつつもコメントさせてもらいました。

【どんな些細なことでもいいので、お返事を頂けたら嬉しいです。】

友達の『ユキ』だとは伝えなかった。

わたしだと伝えると、友人ということ遠慮がいらぬ分、いろ



いろと突っ込まれるかもしれないと思ったからだ。相談はしたいけど、今はあれこれ突っ込まれたい気分ではない。

それに相手の顔が見えないので、顔色を伺わなくていい分気持ち素直に伝えられる。相手が赤の他人なら、余計な気を回さなくて済むから気が楽だ。

コメントを書いたところで、【内緒コメント】にチェックをして管理人しか見れないようにしてから投稿した。

アリサからの返事がきたのは、次の日の夜だった。

4月5日

バイトが終わった後、タカ兄の部屋に遊びに行った。タカ兄の部屋にはしょっちゅう顔を出している。とはいっても、対戦ゲームと一緒にするだけだが、相変わらず付き纏うもやもやを忘れるには最適だし、何よりタカ兄の傍は安心出来る。やっぱり昔からの付き合いがあるのと、タカ兄のしつかりしてて穏やかな気質によるものだろう。

ピコピコ、ピコピコ、ダァンッ

「ああ！」

わたしのキャラが大ダメージを喰らい、思わず声を荒げた。

「くそ、ボケ、死ね！ このくそつたれ！」

下品な言葉を吐いて声を荒げるわたしの隣で、タカ兄は余裕面でキャラを滑らかに動かしていく。

グシャ ドカ ドカカカ ズガァーンッ

わたしのキャラが宙を舞い、呆気なくダウンした。

「ああ！ ちくしょうまた負けた！」

思わずコントローラーを投げ出そうとしたところを、タカ兄が慣れた動作で手を差し出して制止する。この関係は昔からで、タカ兄

の多少のことでは動じない性格は、わたしの影響が大きいはずだと両親や親せきのみんなは言う。その図太さは相当のもので、だから和兄のような一見ヤクザの男と平然と接することが出来たのだろう。わたしはガクンと頂垂れた。何回やってもタカ兄に勝てない。

「これで俺の8勝1敗。それも1敗はわざと負けてやったものだから、正確に言えば8勝0敗」

「うう〜」

事実を叩きつけられ、唸り声を上げるわたし。負け犬の遠吠えだつて分かつてても、悔しくて唸つてしまふ。

「ちよつとは手加減してくれたつていいじゃん！」

「手加減したつて。いつもはユキだつてもうちよつとイケるだろ。

それが今日はボロ負けもいいところ」

「ぐう〜」

「何かあつたのか？」

突然の問いかけに、わたしは思わず唸り声を止めた。

「気のせいかもしれないけど、暇さえあればぼあつとしてるぞ。一応真剣にゲームしてんだけど、時々ふと電池でも切れたように動きが鈍くなつてるんだよ。いつもゲームやってる時は、それしか頭にならないのにさ」

図星だった。ゲームに熱中してるはずなのに、時々ふとあのもやもやが襲いかかってくる。

それと同時に、胸も高鳴つてもうおかしくなりそうだ。

「もしかして、トカゲのことか？」

「え？」

「来てくれなくなつたつて、前言ってただろ？」

すっかり忘れていた。ここ数日はいろんなことがあり過ぎて、火トカゲのことなど頭の片隅に追いやつていた。

あの時は結構落ち込んでいたはずだが、今思えばちよつと物足りなくてつまんなかつただけで、そこまで真剣に悩んでいたわけではなかつたんだ。

「違う。トカゲのことはもう大丈夫」

わたしは素直に首を横に振った。

「そうか……………」

そう呟いたタカ兄の顔が、何故かふと曇った。

「タカ兄？ どうかした？」

「え」

思わず顔を覗き込んで訪ねる。自分の顔が曇ったことに気が付かなかったのか驚いているようだ。だが、すぐに自分がどんな表情をしていたのか思い立ったようで、何やら神妙な顔つきで語り始めた。………… あーいや、もしかしたら、この前の言い方じゃマズかったかなって思ってたさ」

「へ？」

「夢を見て気長に待ち続けなければいいって言っただろ？」

「うん」

「でも、よく考えたら今すぐ会いたいって思ってるのに気長になんて言われても、納得いかなかっただろうなって思ってた。何か突き放すような言い方しちゃったなって。俺だって昔、お前と同じような経験したってのにさ。もう少し言い方変えればよかったよ。ごめん」

手を合わせて、深刻な顔つきで謝るタカ兄。そりゃあ、あの時は納得いかなかったけどさ。

でも、今はそんなことは正直どうでもいい。だから謝られると逆に困った。

「い、いいよそんな！ タカ兄は間違ったこと言ってたよ。あの時は解決策とかなかったから、タカ兄の言うとおりむやみにもがいてたって何もならないと思ったし。だからそんなに気にしないですよ」

「そうか？」

「うん。まあ、トカゲのことじゃないけど、気がかりなことがあるのは事実かな」

「相談にのれるか？」

うーん、と深く考え込んだ。タカ兄は大人だし、わたしよりも恋愛などは経験しているだろうから良い相談相手になるかもしれない。きつとフオローしてくれるし、背中を押してくれるだろう。

でも、止めておいた。いくら頼りになるとはいつても、タカ兄は男。女の子とはやっぱり見方や考え方が違うだろう。それなら、同じ女の子の意見の方が参考にしやすい。

「ううん、いい。他に相談する子いるから」

「そうか」

そう返事したタカ兄は笑ってたけど、どこか寂しそうだった。今まで何かあるとまずタカ兄に相談していたわたしだ。他の子を当たると言われたことで、嫁入りの娘を見送る父親のような心境になったのだろう。

ありがとう、タカ兄。

「おーい、出来たぞー」

台所から和兄の声が響いたので、三人で晩御飯を食べることにした。

もう部屋を出て行ったはずなのに、何故か部屋に行くと和兄がいることが多い。もはや専属料理人扱いではないかとタカ兄に聞いてみたところ、そうではないようだ。

部屋を出て行った後も、新作のレシピを思い付いて作る度にタカ兄に味見してもらっているとのこと。まあ、確かに和兄は外見のせいで怖がられて友達と呼べる人があまりいないらしく、気兼ねなく自分の料理を食べてもらえる人間がタカ兄とわたししかいない。なるほど納得。何もちゃっかりコキ使ってるわけじゃなかったのね。

和兄の料理は本人の見かけに反して、相変わらずお袋の味で胃に染み渡る。意外に良い嫁になるかもしれない、と思っただが、それはさすがにキモイ想像だった。内心でおええと吐き出す。

「おいユキ、さっき話聞いてたけど、男女のお前でも悩みあんのか？ 何なら相談に乗るぜ」

「いや、いい」

即答されたのがショックなのか、和兄はムンクの叫びの顔になって頂垂れた。いい大人が何やってんだよ。

「くう、寂しいもんだぜ。妹ってのはいくら男女でも、いつか羽ばたいちまうもんなんだな。」

「羽ばたくつてオーバーだし。つか、あんたの妹じゃないし」

素っ気なく返すと、和兄はさらに頂垂れて、ついにはテーブルに額を打ち付けた。あのなあ。

「おいおい、ご飯中に何やってんだよ」

すかさずタカ兄が突っ込む。和兄の突発的なリアクションに対する免疫は、タカ兄もわたしも充分ある。

「だつてよお」

和兄はというと、デカイ図体でテーブルに額をくっ付けたまま情けない声を上げた。

「『男女』つて連発してんのに、ユキの奴スルーすんだぜ。いつもなら『うっせーよ!』とか返してくんのに」

……あ、そういえばそうだ。

無視していたわけじゃない。和兄に言われて、反応していなかったことに気が付いたのだ。

「ユキだつてもう子供じゃないんだ。そういつまでも反応してはくれないさ。なあ?」

タカ兄に話を振られ、わたしは「うん……」と遠慮がちに返した。別に故意に無視しようとしたわけじゃないから、何とも言えないんだよなあ。ただ、反応するのを忘れていただけで。

でも、本当におかしいなわたし。和兄に『男女』つて言われると、いつも条件反射で怒鳴り返していたのに。

「それが、さつき言つてた悩みが反応も返せないほど重いか、だな」  
タカ兄の言葉で、今度はギクリと胸がうずいた。言われてみれば、確かにそれはあるかもしれない。タカ兄もさつき言つてたけど、最近それでよく上の空になって「どうしたの?」つてバイト先でも言

われたりするし。

「そんなに悩んでんのかよ。俺じゃあ力になれないか？」

和兄が体を起こし、心配そうに顔を覗き込んできた。項垂れていたのが真剣な表情になったので一瞬面食らった。だけどその真剣な眼差しは、心からわたしのことを考えてくれてるんだなって思えるもので嬉しかった。

「うん、悪いけどね。でも大丈夫。さっきタカ兄にも言ったけど、相談出来そうな人見つけたから。まあ、解決出来そうになかったらタカ兄たちにも相談するよ」

そうか、と言った和兄の表情はやっぱりタカ兄と同じで、笑ってるんだけど寂しそうだった。

和兄も高校でタカ兄と知り合ってから、年の離れたわたしともよく遊んでくれたもんなあ。アホなこと言ってたわたしを怒らせようとするけど、いつも妹みたいに可愛がってくれる。わたしにとっては本当の兄貴も同然だ。

わたしって、幸せ者じゃないか。

こんなにも頼もしい兄貴が、二人もいるんだから。

「二人とも、ありがとね」

心から素直に笑えたのは、久しぶりな気がする。

二人ともわたしの改まった態度にきょとんとして顔を見合わせた。が、すぐに嬉しそうに笑った。

タカ兄の部屋に駆け込んで本当に良かった。

部屋に戻った時には、もうすっかり暗くなっていた。時計の針は午後の九時を過ぎたところだった。

わたしは早速、パソコンを開いて相談への返事が届いているか確認した。メッセージ一件と表示されていたので、すぐさまクリックした。

【はじめましてww 管理人のアリサです わたしの自慢話に付き合ってくれた上に、相談までしてくださってありがとうございます( ; ; ) 大丈夫、大歓迎ですよ？

相談してくださったのに申し訳ないのですが、アタックしろ！ としか言えません(汗)

怖いのは分かります。でも、前に進まなきゃ何も始まりません。その人にはもしかしたら恋人なんかいなくて、逆にあなたに好意を寄せているかもしれない。それが、やっぱり恋人がいるかもしれない。どっちかは断定できませんが、少なくとも相手に聞かないと分からないことだと思います。わたしも憧れの彼(今は歴とした彼氏ですけど?)のことを部活の友人に相談したことあるのですが、「アタックあるのみ！ 少しでも可能性あるなら逃すな」とアドバイスをもらったこともあって、勇気を出せたんです(とはいっても、その友人恋愛未経験だし、行動力のある気の強い子ですけどね。ハハッ)

怖くなって気持ちは分かります。わたしだって最初はそうでしたから。

ならどうすればいいか。怖いって気持ちを誰かに伝え、背を押してもらうのがベストだと思うんですww

だから、こうしてわたしに悩みを打ち明けたユーさんの選択はグッドです！ あとはご期待に応えてわたしが背を押します！ 応援します！ ですからユーさんはひたすら前だけを見てアタックしてください！

ユーさん、ファイト！ 前に進まなきゃ始まらないぞ！

ユーさんの恋が実ることを祈りますww 成功したら是非ご連絡をください。待ってますから

最後に、わたしなどを頼って下さってありがとうございますww もしよかったら、また何かご相談ください？】

部活の友人って……わたしのことだよな。

まさか、その友人本人が名前を伏せて恋の相談をしたとは夢にも思わないだろう。わたし自身、自分の文とは思えないほど内気な内容になったし。

可笑しくてプツと吹き出しながらも、わたしはアリサの返事を何回も読み返した。読み返して、読み返している内に、心の中に何か熱いものが込み上げてきた。これは、高塔くんに対する熱いのは違う。ああいうじわりと浸食するようなものじゃなく、もつとカツと燃え上がるような感じだ。つまり、羞恥心だ。

ほら、思い出せユキ。前に進まなきゃ何も始まらない。自分で言ってたじゃないか。それを相談された相手からそっくりそのまま返されて、情けないったらありゃしないぞ。

ああ情けない！ そうだよ、何内気になってんだよわたし。行動力のある気の強い子なんだろ？ だったら弱気になってないで、自分の言った通りガンガン前に進めよ！

内心でわたしは叫びまくった。それでもなお怯えるわたしがいるのも事実だ。

怒涛の勢いでありがとうの返事をアリサに出し、恥ずかしい自分を叩きつけるようにバツと布団に身を投げた。

ありがとうアリサ、おかげで昔の自分を思い出せたよ。

やらなきゃ始まらない、よね。

そうやって自分を鼓舞している内に、いつの間にか寝に入っていた。疲れていたのか、随分早く寝たと思う。

4月6日



高塔くんと自転車に二人乗りする夢を見た。

ジブリ作品の『耳をすませば』のかの名シーンを思わせる情景だった。シーンの移り変わりはそのまま、あの少年少女がわたしと高塔くんに切り替わっていた。わたしはあの少女と同じように頬を赤らめ、高塔くんのさほど遅く無い背に頭をこつんとのせていた。そこで朝の光が眩しく差し掛かった。

朝目覚めて、まだ眠気が残る頭でぼんやりと考え出した。夢の余韻が心地良く残っている。あんまり心地よくて、まだ体を起こしたくなかった。だから仰向けのまま、何となく彼のことを振り返ってみた。

思えば、初めて彼にあつた時はさほど意識していなかった。

男の子と付き合つたことなんてないけど、これまでわたしが良いなと思つた男の九割は年上だった。部活の先輩だったり、芸能人だったり、モデルだったり。そして年上でも我が儘ではなく、テキパキと何でも出来て頼りになる人。まあ要するに、甘えられるような年上の男が好みだったわけだ。それもかなり理想的な。

だから、細身で可愛らしい顔つきで身長もそこまで差の無く、終始無表情で正直頼りなさそうな高塔くんのことを『男』として見ようとは思わなかった。

だけど今月の1日に、彼の意外な一面を発見したことで、わたしの心に変化が起きた。

火トカゲを見かけなくなって、少し落ち込んでいたわたしを慰めようとした彼。基本は無表情なのだが、何とかわたしに気をもたせようとしてくれているのが痛いほど伝わってきた。

人と話す時もずっと無表情で、とても人に気を遣えるような男には見えなかった。そんな彼がささやかな気遣いを見せたことで、くつくつとわたしの中で小さな欲望が湧きあがってきた。

彼の笑顔を、見てみたいと。

この時は、多分まだ『男』として意識はしていなかったと思う。無表情な男が見せた気遣いが、わたしの中の好奇心を刺激したのだ。昔から物事に対する好奇心が絶えないわたしには、堪らない刺激だった。

そしてわたしは、何とも大胆な作戦に出た。彼に妖精の知識を刷り込む知り合いさんに会いに行こう、と。

知り合いの前なら、少なくとも知り合っただけのわたしよりは気が抜けるんじゃないかと考えた。気が緩んで、無表情を崩す様を、わたしは見たくて仕方なかった。

そう、あの時点ではけして異性として意識してなかった。良い友達になれそうだなとは思っただけ、男女の関係に進展することなんて考えもしなかった。

だけど、いざ約束の日になってわたしの心境が大きく揺らいだ。

好奇心でいてもたってもいられなくなっただけわたしは、早めに部屋を出た。彼の部屋の前を通り過ぎようとした時、わざわざ別々に駅で待ち合わせしなくても、隣同士なんだからここで待ってればいいと思い立った。今出ても約束の時間よりだいぶ早く着くのだから、高塔くんはまだ部屋にいるはずだ。すれ違いになることはない。彼が部屋から出てきて、部屋の前に立つてるわたしを見たら驚くかなと悪戯心が湧いてきたが、何となく焦れったくてチャイムを押してしまった。

寝起きのボサボサ髪で出て来た彼を見て、もっと早く起きろよと呆れつつも、ちらりと何だかワイイなと思った。だから最初は、仕方ないなあと姉貴のような気分で彼が支度を終えるのを待ってた。待っていたのは、確か五分ほどだったと思う。大した時間じゃなくても、待っているわたしとしては暇だった。

暇だったから、ふと突拍子もなくあんなことを思い立ったのかもしれない。

そういえば、男の子と二人きりで出掛けるのって初めてだなんて。

急に恥ずかしくなった。自分でも急過ぎるだろうって思うくらいに平坦な道を自転車でのおんびりと進んでいたのが、下り坂になって急降下する感じだろうか。

もしあの時、高塔くんが五分も待たせていなかったらこんなことにならなかったかもしれない。なっただとしても、それはもつと先のことだろう。だって、まだ初めて話してから一か月も経っていないのだから。

だがもう遅かった。一度相手を異性として認識し出すともう止まらない。高塔くんが支度を終えてもみの木荘を出て行った後、無表情を貫く高塔くんの隣で、わたしは胸をバクバクと震わせながら歩いていったものだ。

そしてあの高級マンションを目にした瞬間、わたしはいきなり不安になり、後悔した。

知り合いが女だということは前々に聞いていて、恋人だという可能性も想定の内に入っていた。

なのに、今更嫌な気持ちになった。高塔くんに恋人がいるかもしれないという想像が、現実として突きつけられるのではないだろうか。来るんじゃないかった、と思った。

だけど、帰る気にもなれなかった。元々誘い出したのはわたしだし、彼の表情の変化を見るという目的があるのだから、ちゃんと目にするまでは帰れない。それに、あくまでも意識し始めただけであって、嫉妬を露わにするほど彼に惹かれているわけではないのだ。

わたしは当然引き返すわけもなく、予定通り知り合いさんに会い

に行った。

彼女、風子さんは落ち着いた雰囲気の美人だった。喋れないというのには驚いたけど、それを除けばごく普通の……いや、魅力たっぷりの女性だ。高塔くんが惹かれても可笑しくない。

事実、彼女の前では高塔くんの表情に変化があった。彼女にからかわれたことで、眉を顰めてほんの少し声を荒げたのだ。眉を顰めるところなんて、荒げた声なんて、二人きりの時には見たことも聞いたことも無かった。

ショックだった。

彼女のことは嫌いじゃない。むしろ、優しくて穏やかで人懐っこそうで、とても好感が持てる。

でも、彼女が不細工でみっともない風貌だったらよかったのに、なんて滑稽なことを思った。不細工でみっともなかったら、高塔くんが惹かれる可能性はぐんと落ちるはずなのだ。

そんなことを思いながらも、結局また会う約束をしまった。

正直、重かった。ごめんなさい、風子さん。

馬鹿だな、わたし。

何度心の中で呟いたことだろう。

結局、彼女に高塔くんとの関係を聞けずに部屋を後にした。見送る彼女の人懐っこそうな笑顔が痛かった。高塔くんの表情の変化を見るという目的を果たしたはずなのに、何でかもやもやとした気分がまとわりついていた。

もやもやを抱えながらも、高塔くんと二人になるとまたドキドキし出した。何て単純なんだわたし。

予定外の雨で困っているところに、高塔くんが折り畳み傘を出す。準備良いと思っただけ、ただの入れっ放しと判明。あんまり面白くて、可愛くて、ついバツとわたしの心に晴れ間が指した。

そうして二人で相合傘をすることになって、わたしは浮かれた。

恋人同士みたいで嬉しかった。

だけどその内、全然濡れていないことに気付いた。折り畳み傘って普通の傘よりは小さいから、塗れる確率上がるだろうに。それも二人で入ってたら尚更だ。

横を見てみると、高塔くんの体がかなり濡れていた。そこでようやく自分の方に傘を寄せてくれたことに気付いた。わたしは慌てて傘を突っ返すけど、高塔くんは何でか意地になってこっちに傘を寄せてくる。キリがないので仕方なく厚意に甘えることにした。何だか悪いなと思いつつ、すごく嬉しかった。

わたしは浮かれてばっかいたのに、濡れないように気を遣ってくれたんだ。

見かけに寄らず、優しいなあ。

ますます胸の鼓動が高まっていった。彼にどんどん惹かれていく自分を、もう認めざるを得なくくらい。

胸が熱い。熱いものが込み上げてくる。心地良いんだけど、苦しい。でも手放したくない。

これが、恋なのかな。

布団の上で自分の気持ちを振り返っている内に、また熱い想いが込み上げてきた。苦しい。息が詰まりそうだ。もう限界。

これをずっと胸の中に入れておくって、絶対に無理……………

……………よし、決めた。

今度二人きりになった時、告白してやる。

風子さんという恋人がいるかもしれない。  
構うものか。

『ユーさん、ファイト！ 前に進まなきゃ始まらないぞ！』

そうだ、前に進まなきゃ何も分らない。

それに、告白するのはこっちの勝手だ。

振られたらそれまでだ。それ以上もそれ以下もない。

もし振られたとしても、わたしのことを可愛がってくれる兄貴が二人もいる。そいつらの前で思いっきり泣いて、慰めてもらって、スツキリすればいい。

高塔、あんたのせいで苦しいんだ。だからまずは、思う存分ブチまかせろ。

わたしは心の中で気が済むまで怒鳴りまくったところで、勢い良く体を起こした。朝の光が、わたしの背をぐいと押ししてくれるように気持ち良かった。

\*\*\*

4月7日

今日からわたしの大学生活が始まる。

待ちに待った華のキャンパスライフ。準備も万端。後は、大学生  
活を満喫するのみ！

……と思っていたのだが、わたしのキャンパスライフは初っ端か  
ら大嵐だった。

まさか、高塔くんも同じ大学だなんて。それも、希望したサーク  
ルも同じだなんて。

あまりにも美味しい偶然なのだが、いくらなんでも展開が早過ぎ  
る！ 決心したとはいえ、そんな急接近じゃあ心の準備が出来ない！

いや……これは絶好のチャンスだ。絶対に逃しちゃ駄目だぞ、雪  
花！

初めてのキャンパスライフまでもが、はらはらドキドキの連続に  
なりそうな予感がした。

わたしのトカゲ観察日記 その三（後書き）

まだまだ続きそうです。一体いつ終わるのか（汗）。大丈夫、ちゃんと終わらせませすww

トカゲ出てきてない（汗） 大丈夫、ちゃんと後で出てきます（本当だろうか！）

ご意見とご感想をお待ちしてます



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4614v/>

---

妖精だより

2011年10月3日03時39分発行